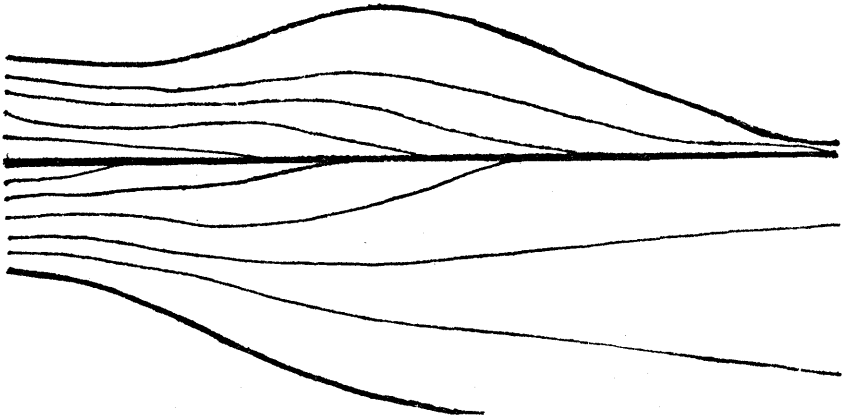
創刊八十周年記念

連載インタビュー



児玉　省

〈聞き手〉　大戸美也子

児玉　いじめないでね、アハハ……

大戸　先生はお生れは一八九六年？

児玉　そうです。

大戸　十九世紀の方ですね。

児玉　アハ…。今八十三。今年八十四になるよ。

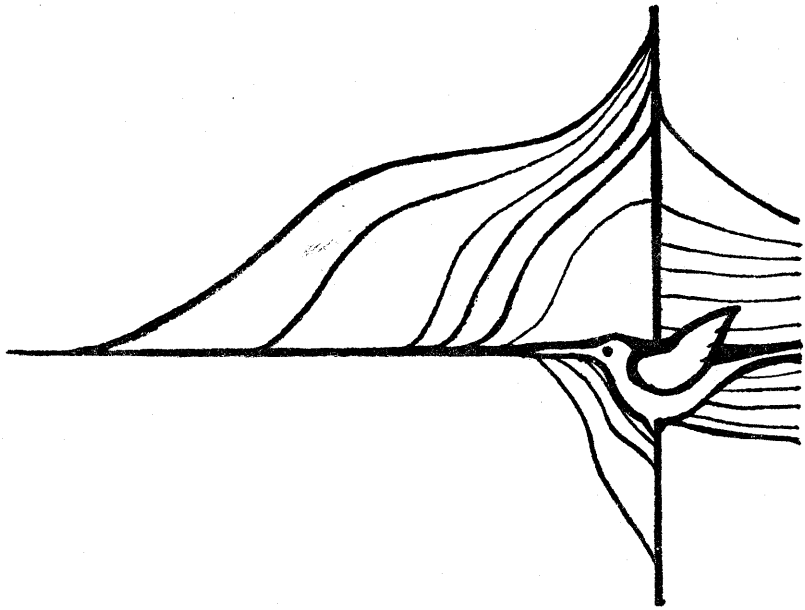
大戸　千八百年代ですか……何か年表見ないとピンとこない(笑)。一八九六年……

児玉　ピアジェは僕と同じだよ。あの人の方が偉いよ。

大戸　(年表を見ながら)そ、ピアジェ生れる。デューイが実験学校を作った年ですね。

児玉　そうです、その年です。あなた、いろんなこと調べてるね―。

大戸　はい、あの、一生懸命調べてます(笑)。先生、このお話し合いは『幼児の教育』に載るそうですけれど、『幼児の教育』が誕生したのは一九〇一年ですから、先生の方が五つお兄さんです(笑)。ですからお兄さんの立場でこの八十年間を振り返って、いろいろなことを教えていただきたいと思います。あの、『幼児の教育』と児玉先生っていうのは大変になにか、重なっている所があるように思うのです。『幼児の教育』はもともと子どものしつけ方とか性格形成の問題などを通して当時の新しい研



児童研究と保育〈1〉

究を紹介すると共に、親を啓蒙するというようなことを目指して始まったと思うのですけれども、先生の人生もまた、子どもの人格形成とかそれにかかわるしつけに、今までの研究のほとんどを献げてきていらっしゃいます。しかも、それを非常に科学的な方法で研究しながら、一方ではそれを教育界に応用するというところで御活躍なさって、何か先生御自身が『幼児の教育』の内容それ自体と申し上げてもよいように思われます。そういう意味で、先生のこれまでのお仕事を振り返っていただくと、我が国の幼児教育の中身の変遷と対応してくるのではないかと思いまして、今日の対談を大変楽しみにしてまいりました。

児玉　あのね、私がね、幼児教育に具体的に関係するようになったのは、日本女子大学が――あそこはもと専門学校だったね――初めて女子大学になった時からだよ。たぶん昭和二十四年だったと思うがね。その時に児童学科ができたんです。その前に非常勤講師として勤めていて、子どものことに関係のある学科に関係していたこともあって、女子大学に児童学科をつくることに関係したのは僕なんだよ。そして当時のＧＨＱ（占領軍司令部）の指導官はこれに力を貸してくれたが、その指導官は、児童学科

は家政学部の一つだといって試案を示した。またカリキュラムの原案みたいなものを寄こしたので、それと僕が考えたのと混ぜ合せてつくったのが、最初の児童学科カリキュラムであった。そこから新制大学の児童学科がスタートしたわけ。

シカゴ時代
――デウイイとミード――

大戸　戦後の幼児教育の研究拠点である児童学科を創設され、その中にアメリカの意向とか、シカゴで勉強されたことが、その時、生きてきたというお話ですが、そのルーツを探るためにも、シカゴ時代のお話から伺いたいのですが……。いつ頃、いらっしゃいましたか。

児玉　二十一年。一九二一年(大正十年)からね。僕がアメリカに勉強に行くようになった動機はというとね、僕は当時、大阪毎日新聞につとめていたが、新聞の仕事は好きであったが、どうしても仕事に満足できなかった。というのは、僕は、知らないことを知ったように書いたので、これがどうも耐えられなかった。当時の哲学ブームの影響はあったにちがいないが、もっと根本的な勉強をしたいと思ったね。これが僕が新聞社をやめ、哲学の勉強を始めるようになった動機、そしてアメリカで勉強をしようと思った動機だよ。

そうして、卒業したのが二十五年ね。そして、大学院に二年おった。その時最初、僕は哲学を専攻していたが、デウイイの哲学に触れてね。偉いと思ったなー。

大戸　直接お習いに？

児玉　いや直接じゃない。もうデウイイはコロンビアに行って、いませんでしたよ。とにかくあの時、デウイイを読んだ時の感激は忘れられない。それほど感激しました。一つはね『実験論理学論文集』という本で、それはね、デウイイの論理学のおそらく基本だろうね。それから引き続いて"Democracy and Education"。その二つで僕はすっかり考え方を変えられましたよ。それがね、ずーっと続いてきちゃってね、デウイイの主な著書は全部読みました。そして今に至るまで、デウイイの考えは、これは僕を支配したと思っている。

おおと　みやこ氏

大戸　あの、先生は一九二一年から二十七年までアメリカにいらっしゃって、ちょうど一九二〇年代のほとんどをアメリカで過ごされたわけですね。その当時のアメリカをちょっとみてみますと、教育の方では随分いろんな実験、いわゆる Progressive Education の組織ができて、ダルトン・プランだのコンダクト・カリキュラムなど、次から次にいろいろのプログラムがアメリカの各地に発酵していた時代ですね。そこへもってきて、今度は一九二三年にはロックフェラー・メモリアル財団から多額のお

金が寄附されて、あちこちに児童研究所ができて新しい研究が競うように開花した、という児童の教育と研究のまさに黄金時代にアメリカにいらして勉強なさって、私ども本当にうらやましいのですけれど。

児玉　いやあ、それがね、それはその通りだがね、シカゴで勉強している時は、よそ見はせんかったからね。そしてね。大学ではね、いじめられるばかりだもんね。また本当に勉強したよ、僕は。ヘーゲルの『論理学』を勉強した時はね、三か月間新聞も読まなかったし、一切他の本も読まなかったね。たった一つのコースをとっただけだよ。それ位『論理学』に没頭したよ。そして昼も夜も大学の図書館に通ってましたよ。そんな余裕はなかった。

こだま　はぶく氏

大戸　それでは先生、目をつぶってらした時代かもしれません。当時のことを思い出していただけるかと思って、先生の時代の本、幾つか持ってまいりました。一九二四年発行の、これは"Childhood Education"創刊の年の本ですね。それからこれが"Progressive Education"の創刊号。

児玉　ありゃそうかね。あんたの方がよう知っとるぞ、こりゃ。

大戸　それから先生、とてもおもしろいものがあるんですよ。一九二四年から五年のシカゴ大学附属のエレメンタリースクールの便覧です。シカゴはキンダーガルテンと小学校の、今でいう幼小一貫制に大変関心を持って、随分実験的なことをやっていたらしいですね。

児玉　そうです。とにかくデウイイのラボラトリー・スクールは、デウイイはもういなくなっていたが、その精神は残っていたからね。そしてデウイイの、要するにプラグマティズムの思想が支配していたから、その影響はありますよ。結局はシカゴスクールっていう学派は、哲学だけじゃなく、心理学からはじまって、ポリティカル・サイエンス、エコノミー、ソシオロジー、その他社会科学全部にわたって、それがシカゴの全学園に浸透していたんだ。すさまじい時代でしたよ。だからね、哲学の先生はね、全部プラグマチスト。偉い人達がいましたよ。そこにミードがいた。ジョージ・ハーバート・ミードね。これは偉くってね。僕はこの人から一生を支配する影響を受けた。

大戸　どういう面で影響を受けられました？

ミードの自我形成論

児玉　ミードの思想は非常に多角的でまた難しいが、デウイイとともに僕を一生支配した哲学者、社会心理学者なので、少し面倒でも説明させてもらおう。彼は一九三

一年に亡くなったが、亡くなってから彼の評価は高まる一方で、今はもうアメリカだけでなく、世界各国で彼の思想の信奉者がでている。彼の思想は非常に広汎にわたるが、その中心的題目の一つは、自我の形成理論だろうね。辛抱してもらいます。次の引用は彼の著書のあちこちから縮少して引用してある。「個人に対してその自我の統一を与えるのは、組織された社会または社会集団であって、――この社会集団を一般化された他者（generalized other）と呼ぶ――この一般化された他者の態度こそ全地域社会の態度である。……社会が個人の行動に影響を与えるのは、この一般化した他者の形である。……そして個人が一般的他者が自分に対して示す態度をとることによってのみ、個人と他者の間に共通の話題の世界が存在するのである。自我が発生する過程は、グループにおける個人間の相互関係、すなわちグループが、前もって存在することを前提としている。……個人は、自分が他者の立場をとり、他人が自分に対して行動するであろうように自分に対して行動する限りにおいて自我が成立するのである。……子どもは絶えず、彼の周囲の社会の態度をとっていくのであって、それで初めて組織全体の中において機能し得るものとなるのである。それは子ども社会の自意識的一員として形成していくのであって、こうして子どものパースナリティができ上ってくるのである」

もとお茶の水大学の松村（康平）さんのサイコドラマの理論、すなわちロールプレイイング理論、このミードの考えに基づいたものです。その他多角的ないろいろな考え、彼、偉かったな。その後何十年、僕の日常思考は陰に陽に、彼の考えに導かれてきた。結局僕は、哲学専門の道を進まなかったが、心理学やその他の理論はいつもミードの理論におんぶしていたようなものだ。あの幅の広い、深い思考は、ミード先生の顔つきとともに想い出されるよ。ミード先生は偉い人でしたよ。シカゴ学派のその他の立場は、思考、すなわち精神現象の生物学的発生と社会学的発生をとり、また、真理の実験的証明の上に立ってのみ、その証明された範囲内においてのみ、その妥当性を認めることであった。

大戸　そうしますと、一番最初は論理学という人間の認識の世界を問題にしていらしたのが、プラグマティズムとか、ミードの洗礼を受けて、論理がどのように形成されていくかという方向、内的なものの形成過程へ関心が移っていらして、大学院からは心理学へ移られたわけですね。

児玉　そうです。大学でもね、心理学を相当やったけどね、それは哲学を援護射撃するための心理学であったわけ。ところがやってみると、これはどうも、思考も人生哲学も、思弁的なものだけでは解決できないと感じてきたんだね。これはどうしても科学でやらなければならない。人間の精神を考えるためには、科学的にやること。そのためには心理学だと思った。で、大学院ではもっぱら心理学をやったよ。

大戸　心理学といっても随分幅が広いですけれど、性格形成ですとか、しつけの問題に関心をもたれたのは、やはりミードらの人との交わりの影響の……

児玉　シカゴ大学の心理学プロパーっていうのはね、その中心はネズミでしたよ。これには世界的に有名なカー(Carr)って人がいてね。これも偉い人でね。鋭い頭の持主でね。で、僕もネズミを使って動物実験やったよ。毎晩八時に実験室に行って一時間ずつ、ネズミを迷路で走らせながら実験したよ。人間ではできないことを、動物を使って検討しようということで、比較心理学の考え方だよ。シカゴにはまだ、いわゆる児童心理学プロパーはなかったな。しかしプラグマチズム哲学の立場からすれば、発生発達的に人間行動を考えなければいけないというのが、その主張だがね。そこで、この点については満たされないが、刺戟を感じたままでシカゴは終わった。当時は教育心理学ではジャッドやフリーマンなどがいたが、児童を専門的にやる心理学者はいなかったんだ。

それからもう一つ、生理心理学に入ったね。何故かというと、シカゴ学派では、意識も言語も心も、生物が獲得してくる過程である—だから生理心理学をやらなければ、人間実体の把握はできないだろうと思ったわけだ。当時シカゴには有名な生理学者、神経学者が何人もいたが、たまたま—エール大学からきていたエンジアーという人の生理心理学の講義をきいた。これまた啓発されて、感心しちゃった。僕はね、何でも感心するからね(笑)。エンジアーという人は、いろいろ教えてくれた。特にシェリントンの神経系統の研究、エドリアンの研究、ラッシュレイの猿の脳の解剖の研究など面白かったね。要するに僕としては頭の働きをいかにして生理学に結びつけようかと一心になった。で、心理学の学習の法則——主として連合作用——を生理学に結びつけてみようと思った。で、幼稚な仕事ながら、そういうことを踏まえて、「連合作用の生理学的基礎」という論文を出したところが、おもしろいといって最高点くれたよ。(この論文は日本心理学会第一回大会の時に発表した)僕は哲学を出て、大学院では心理学に入っているだろう。で、精神活動を、簡単に言えば行動を、一つにはミード先生の社会心理学、もう一つは生理心理学の両面から攻めようと思ったんだ。それから、ラッシュレイの猿の脳の解剖の研究——すばらしい研究——も聞いたな。ラッシュレイという人は、いかにも書生っぽらしくて、ゆかいな人であった。

大戸　なるほど、でもおもしろいですね。シカゴって、もともとワトソンがでたところですね。ですから、うっかり比較心理学へ行ったらワトソンのようになってしまうのが、ミードで歯止めになって。

児玉　そうなんだよ。ワトソンはミード先生の弟子だよ。ところが僕に心理学を教えたカールって先生はね。ワトソンをびしびし批評するんだよ。そりゃあもう、おもしろかったね。カールって人は頭が良かったから。鋭い理論的な批評でしたよ。

大戸　ワトソンが本を出したのが一九一九年ですが、第一次大戦後 "back to America" で、そういうアメリカイズムをワトソンが極端な行動主義を唱えることで代弁して、まさにその本が出た頃に先生は勉強してらしたのですから、もう白熱の論議が展開したのでしょうね。

児玉　僕らはカールの影響を受けたけれども、カールは決してチイチエナーなど昔の心理学者じゃなくて、きわめて穏健なビヘイビアリストだった。今じゃ皆ビヘイビアリストだがね。その影響を僕は受けたんだよね。そしてまあ、何かしらん、手探りばっかりして帰って来たんですよ。

帰国して……

大戸　昭和三年に日本に帰ってらして、最初にどういう所にお勤めになったのですか。

児玉　心理学で雇ってもらおうと思ったけれど雇ってくれないんだよ。というのは当時日本の大学には心理学の先生一人あればよかったんだ、どこでも。

大戸　講座が一つってことですか。

児玉　講座もくそもないよ。一人しかいないんだよ。だから僕、どこへ行っても雇ってくれないんだ。それから慶応で頼んだらね、英語の教師ならあるっていうんで行った。それから日本女子大に行ったが、女子大で僕が実際に心理学などを教えるようになったのは、帰国後八年か十年位してからだね。当時女子大におられた松本亦太郎先生が病気になられて、その後釜っていうことで入れてもらったわけ。女子大の児童研究所は一九二七年にできているが、正式に関係するようになったのは一九四八（昭和二十三）年に専任になってからで主事を十五年つとめたよ。それまでは波多野（完治）さん、松本（金寿）さん、そして畠山さん（後の波多野夫人）などが出入りしていたよ。それから児童研究所では、毎年何年間か六百人位の子どもの相談を受けたね。あの当時の相談熱はすさまじいもので、僕も随分悩まされた。

大戸　先生が日本に帰ってこられた昭和四、五年頃っていうのは、日本の幼児教育界が倉橋先生を中心として新しい教育ブーム、ちょうど先生がアメリカで体験なさったことが、日本においても、小さいながらも一つブームを作っていたと思うのですけれど、そういうことは女子大の方にまでひびいていなかったのでしょうか。その辺、どう観察されていらっしゃったのかお聞かせ下さい。

児玉　日本女子大の豊明幼稚園には、山崎（？）先生とかいう方がいらして一家を成していたと思う。しかし特に進歩的であったとは思わなかった。僕は援助はしたが、それ以上のことはしなかった。これは豊明の伝統でもあったようだ。大学の先生が行って、幼稚園の先生を牛耳っちゃいかんよ。僕もやらなかった。女子大は進んでいる方だったがね、それでもね、見ておると、僕の考えと違うようだったね。

大戸　先生はプログレシズムそのものをアメリカで体験なさって、それと対応するようなものがでてきて、違うって感じられたってことは大変興味深いんですが。先生の二、三年前に倉橋先生がアメリカに遊学しまして、あちこち短期間ずつまわっていらっしゃいました。それで帰ってらしてから『幼児の教育』に見聞録などを載せていらしたのですが、そんなものをお読みになる機会はございましたか。

児玉　読まなかった。一生懸命自分の考えたものだけ勉強して、倉橋先生のものは

あんまり見なかった。ただし、倉橋さんの誘導理論、あれは偉いです。

大戸　先生がアメリカで経験なさった教育と、またデューイの教えなどと、呼応するようなものがありましたでしょうか。

児玉　その通りです。誘導理論はデウイイの教えと同じようなものだ。ただし、日本的な装いがしてあった。

大戸　どんなところに日本的な装いを感じられました？

児玉　考え方から表現からすべて。僕に言わせると、あれはデウイイに日本的着物を着せたと考えていい。ただし、僕ね、余り現場を知らんし、実際問題として理論だってまだ確立してるわけじゃなかったので、勉強しなくちゃならんと思ったわけだよ。それからね、まっしぐらに勉強に取り組んだ。そこでね、僕はフレーベル読んだよ。原典読んだよ。それから、モンテッソリーからピアジェといったぐあいに。また有名な進歩主義の教育書全部読んだよ。

大戸　ピアジェは英訳で読まれたのですか。

児玉　ええ大体英訳です。フランス語は時間がかかって。僕は最初、ピアジェにあき足らんで批評していました。それは今も変わらんよ。ピアジェのあの、いわゆる子どもの自己中心性の研究ね、ありゃ、あのままでは頂けない。

大戸　どういう点で？

児玉　第一に自己中心性項目の分類がおかしいよ。第二に定義がおかしいよ。定義的にいうと、独語（ひとりごと）はイメージだが、対象をおいてしゃべっている社会性言語であって、そういう意味で社会性のない言語はない。これはミード先生の教えから考えている。また、集録した言語は、整理の方法によってかなり結果が違うこと、またそれよりも、対象を違えると結果が違ってくることを僕は見出した。一九一五年、二度目にアメリカに行った時、ミネソタ大学の児童研究所で、アンダソン所長の求めで、大学院の学生と先生方に僕の研究を講演（一寸言葉が大きいが）したら、当時のアメリカ人は僕の話にうなずいてくれたんだよ。ピアジェは当時は充分に感心しなかったよ。ところがその後、研究がどんどんでてきて、読んでいくうちに偉さが分ってきた。

大戸　ピアジェ自身も随分こう柔軟な方ですね。批判を取り入れてまた変ってきていますから。

児玉　ピアジェは偉いですよ。偉いけれども、あの時のピアジェはいけないと思った。

大戸　そうですか。では戦前はそういう風に横目で幼児教育を見ながら、一生懸命勉強なさって、そして戦後二十四年、児童学科を作ると同時に非常に大規模な研究を始められ、教育にもだんだんに関心を持たれて、今や幼児教育の方にすっかり入っていらしたわけですね。

児童研究
――感情と社会性と――

大戸　女子大の研究所では様々な研究をなさいましたが、特に戦後すぐにはじめられたしつけの研究は、全国を歩いて調査された大規模なご研究でした。そこで今度は、性格形成やしつけの問題に移らせてい

ただきますけれど、現在の研究は昭和二十年代の研究と変わってきておられますか。

児玉　変わってきています。しつけの研究は全国各地四十二か所を廻って、子どもと母親六千組以上の家庭を調べたが、それが終ってから、また一部分はそれと平行して、子どもの臨床問題に入って幼児から児童の問題行動の研究にかかった。加州大学のホンチク、アレン、マクファレンのガイダンス・スタディにヒントを得て、問題行動項目を作成し、小児科の先生方と心理の人たち十名ばかりの協力で、後十年近くもかかってある程度幼児の資料に基づいて問題行動の因子分析を行なった。こういう研究は日本ではあまり行なわれていなかったので、多少悦に入っていたわけだが、どうも人が余り使ってくれてるようでない。まだ未解決の点が沢山あるが、多少は自信がある研究だよ。

その他時々の研究は数多いが、これらを別にして、ここ数年間に取り組んでいる研究が三つある。大体は昔の教え子の人たちと一緒にやっている。一つは幼児の社会性の研究で、今までの幾つかの外国の研究を参照して独自の項目を作成し、家庭（母親による）と施設で観察したことを記入した結果を検討している。もう二年位かかるんじゃないかな。結果は学会にずっと出してありますがね。社会性の発達は、家庭と施設の両方を考えなければならない。施設としては、僕が三か年間園長をしていたメゾン・ド・クール園を使い、家庭で親が観察した子どもと現場でみる子どもの社会性の発達差を見ようとしたわけですよ。普通の社会性の研究は、どこともなしに、家庭と施設での姿の複合写真みたいなものであるが、これには無理がありますよ。社会性の表現も形式も、場面により対象によって違いますからね。それを合わせて考えなければならない。はじめから一つみたいに取扱うのは適当でないよ。やってみれば分るよ。

もう一つの研究、それは体育関係の人たち七、八名と、幼児の運動能力の発達の研究をしているよ。運動が幼児の社会性発達にも、知的発達にも関連があると思うし、また今の幼児の運動能力が落ちていることも確かなようである。この研究に四年かかった。幼児の運動能力に基準がつけられるかどうか分からないが、一応早い方、おくれている方くらいの差は見出せるでしょう。もう一年位でまとまりそうだ。

大戸　人間の性格は、それ自体、複合的要素から成り立っている外に、一つの要素をとりあげてみても、子どもの生活場面の特性によって異なる影響を受けて発達していくということですね。先生の研究はどれも規模が大きいですね。

児玉　だから、実はね。すこし広すぎて困っている（笑）。それともう一つ、感情の研究しているよ。感情の研究はおもしろいぜ。

大戸　あのブリッジェスの研究とはまた違うのですか。

児玉　あんなのはダメですよ。しかしあれしか書いてないよ、人は。

大戸　そうなんですね。情緒のことはさんざん言われている割には、一九三〇年代とか二〇年代の研究をスルッと今、持ってきていますよね。

児玉　みんなあれだけ書いているよ。

大戸　あれとどこが違うのですか？

児玉　あれはね、第一ね、あんなに幼児の早い時期から感情を分けられやしないよ。例えば二歳までに相当分かれるということを言っている。あんなことありえないよ。幼児にね、あんなソフィスティケイトされた感情はあるはずないよ。そういうこと無視してるよ。

大戸　もっとカオスっていうか、混沌としたところがある。そういうことでしょうか。

児玉　僕は感情っていうものはね、子どもにおいて、最初からすっきりした単独的なものはないってこと感じるんだ。子どもの感情ってものはね、怒りや悲しみや全部一緒だよ。単独の感情は頭の産物であって、そんなものはないんじゃないですか。

大戸　子どもにじかに触れて、子どもから出てきたデータからもう一度見直す、研究の観点を子どもの方に移すところに、先生の何というか、延々と研究を続けるという起動点があるみたいですね。

児玉　そうです。だから今、感情と社会性と二本立でやってるの。それによって子どもの性格像をとらえようとしている。

大戸　性格に関してもう一つ重要なことは、コンティニュイティーとディスコンティニュイティーの問題、連続と断絶という問題についても先生はお考えを深めていらっしゃいます。ただ、先生の立場は、幼児教育で性格形成を重視する前提として、よく一般に云われる「三つ子の魂百まで」式の発想――発達の連続性の方を一方的に強調する立場ではないと思うんですね。先生のご本を読みますと、幼児期の生活というのは、むしろ不安定で変わりやすいんだと。幼児期はうつろい易いけれど、性格形成にとって大切な時期でもあるという、この微妙な関係を幼児教育者にわかってほしいのです。いつまでも、ナイーブに「三つ子の魂百まで」なんていってないで。

児玉　というのは、性格っていうものは、その子どもの大雑把な行動の方向を示すものであって、それこそある意味からいうと、教育の重要目標だよ。その方向は、何もわれわれがこう行けということではないけれども、そうしなければ、どういう子どもが育っていったらよいかっていうこともありえないよね。それからもう一つ大切なことは、特性がどこまで続くかわからんけれども、続かないということはありえないんだよ。人間が同じである以上続くんであろうと。ただし、どう続くかというのが問題だよ。流れの方向は違っていても続いているんだよ。その見通しを持つことは幼児教育の大事な仕事だろうね。それで、今欠けている知識はそれだよ。今後、十年後にどうなるかっていうの。そのためにはどうしたって、いわゆるロンディチュディナル・スタディ（縦断研究）になってくる。日本にはこれがないよ。

大戸　それにもかかわらず、一時期、幼児期はクルーシャル・イヤー、決定的な時期といわれて、それがために幼児教育が大変ブームになったことがあるのですけれども、最近そのブームも少し下火になって、クルーシャルではなくて、レラティブリーにセンシティブな時代、比較的相対的に

敏感な時代という風に少しずつ落ちついてきました。また、すべてに対して敏感なのじゃなくて、ある時期は性格のある側面、例えば言語獲得の上で非常に敏感であるとか、ある時は社会性に対して非常に敏感という風に落ちついてきたのですけれど、そういう見方は先生、どういう風にお考えになりますか？

児玉　その通り。あのクルーシャルって言葉は恐しいよ。日本人が好きなんだね。特にね、神経学者が好きらしいね。頭はどの時分に発達するとかね。大体の傾向は別として、全部こまかく当てはまるかどうか。違った例があるのをどう説明するかというんだよ僕は。

保育のなかで……

児玉　そこで最後に、僕の言いたいことの最後だが、それじゃね、幼稚園教育というものは何も介入して与えないでやれるか、ということをやってみた。僕は実際実験したんだよ。これは二十人か十五人のクラスでね、先生五人つけてやったんです。子どもは全部自由にしてあって、うんと遊具を与えた。そして先生は全然手をつけなかったね。で、新しい子どもがきた時でもね、ほっとくんだよ。例えば初めて入った子どもってのはね、ボーッとしてますね。けれどもね、見ているうちに他の子どもの遊びに魅かれちゃって、一歩一歩近づいて入っていく。そうするとほかの子どもは受け入れる。幼稚園の模範児童っていうのは教科書的に言えば、「さあ来て入り給え」って言うんだが、そんなこと言いやしないよ。子どもっていうのはただ知らんふりしているよ。ところがね、だんだん入って来るんだよ、一人で。そうすると子どもが連れていっちゃう。この過程見ておって、こりゃ、そういうことも介入しなくていいと僕は思った。介入してもいいが、しなくてもいい。ところがだね、子どもたちがやっていたことを、全部どういうことをしているか分析してみたよ。来てから帰るまでやっていることを記録して、分析したらね、そこにはね、何もかもありますよ。いわゆる六領域、大部分ありますよ。六領域なんて、別々にやることが必要かな。ただ何が少ないかがわかった。自然がないよ、それから音楽がないよ。

大戸　子どもの自由な行動をずっと見て、それを項目をたてて切ってみたわけですね。

児玉　そうです。全部記録したものを分析したんです。

大戸　なるほど。自発的活動を尊重する保育をしている幼稚園だと、今の先生の研究は大変助けになると思いますね。そうすると、大人が介入する場所をいくつか除けば、あとは子どもが自前でやりだすということですか。

児玉　そうです。自前です。うちではけんかも介入しません。それともう一つ言いたいことはね、子どもは駆けるだけではいけないということ。ていうのはね、静かな時間がなくちゃ身につかないものがあるよ。

大戸　なるほど。

児玉　モンテッソリーの「沈黙の授業」っていう言葉は、あれはやり方は僕は感心

しませんけどね、必要だよ。NHKの幼児向番組のワッワーっていうあれね、あれだけではだめだよ。ところがね、子どもはもっと静かな瞬間に学ぶものがあるんだよ。忘れちゃいけないと思うんだ。そうしなけりゃ子どもの情操は育ちません。

大戸　非常に大切な面ですね。保育の現場ではつい、にぎやかな活動に生き生きとした子どもの成長をとらえがちで、今おっしゃったように、静かで一人ぼっちでいても内的世界で生き生きとしている姿がなかなか見えてきません。子どもを見ていると、ボケーッとしている時があるんですね。その時はわからないんですけれど、後で見ると、それが次の活動の足場になっていることがあるんです。

児玉　それです、それです。それを言うんだよ。それが大切であってね、そういうことをわざわざ奪うことを幼稚園の指導と考えているが、そうじゃないの。

大戸　そうですね。先生のお話を伺っていますと、人間はいろんな面があること、いろんな形で成長していくこと――大人が介入する場所、介入しない方がいい所があること……幼児教育が本当に複雑な人間の成長を見続けていくという巨大な仕事であることがよくわかります。先生は、八十年かかって、この巨大な仕事を悪戦苦闘してやっていらっしゃるわけですね。

児玉　やあ、八十年にしちゃ、仕事の時間が足らんがね、そういうことを感じますね。

大戸　お話伺っているとあんまり幅広くてつきないのですが、そろそろ終りに致しましょう。

先生は人格を、それも非常に幅広くとらえて、そしてその変化もとらえて、しかもその変化を促す諸条件にまで目を配って、そういう心理学の側面が好きだっておっしゃっておられます。これは幼児教育をする者にとって大変有難い角度だと、かねがね尊敬して参りましたが、今日その問題意識のオリジンから伺うことができました。先生の広汎なお仕事は、もっと教育界に還元できると良いのですけれど、今まで先生は沢山本をお書きになることをなさらないで、研究ばかり続けていらしたものですから……

児玉　僕はね、本は書けなかった。というのはね、書こうと思ってもね、あやふやで書けなかったよね。

大戸　本当に良心的に研究していらっしゃると、本当のところ、わからないっていう所まで行っちゃうんでしょうね。わかるためにやって、結局またも一つわからない世界に突入していくわけで。そんな風にしていらしたものですから、オープン・エンドで、本当に開かれて、まだ研究をお続けになると思うのですが、今までの中にも、環境の重要さとか、子どもの自発活動がいかに子どもの多面的な発達を自ら作り出すかとか、それから社会性っていうものが、場面場面で非常に違っていて、しかも子どもの成長によって、場面の意味が同一場面でも違ってくるとか。それから感情の発達の経路にしても、あんな風に割り切れるものでなくて、もっとごたついたカオスのような、その中に同じ悲しみと喜びが背中合せになっているような、そういうようなこ

とを研究の中ではっきり摑んでらして、それを幼児教育の中で皆が消化していかなければならないことだと思うんですね。

それと、こうして八十年間、まだ第一線ですよね。そしてまた新しく八十年に向けて、児玉研究所までできていらっしゃるそうで、その原動力っていうのは何んてことない、生きた子どもをしっかり見て、そして見ながら発見して、自分のデータの方を作り変えていく。その謙虚さが、生涯にわたって研究を推し進めるエネルギーになっているような気がして、私、大変感銘を受けました。

児玉　そりゃね。しかし要するに、広げすぎてまとまらんという姿だよ。本当はもう少しまとめて、本を出してくると良かったであろうけれど、まとまらんから書かなかったからして、一層まとまらんかった。

大戸　随分示唆的なお話しですね。今まで多くの人が急いでまとめすぎたから、幼児期がちんまりとまとまりすぎてしまった。本を書くとなると、ある程度輪郭を作らなくてはいけないし、そして最後には何かよい方法みたいなものを提示しなければいけないようなサービス精神が働きますから。そういうような本がありすぎます。ところが幼児期は、先生がこうして長い間真剣に取り組んでいらしても、とても手におえない位複雑で大きな存在であることをお示し戴いて、八十年代に向けて大きな宿題を与えて下さったような気がいたします。

最後に、八十余年をふりかえられて、どのような感想をおもちでしょうか。何しろ、私の年齢の倍以上の長さで、見当がつかないのですけど。

児玉　とにかくね、学問は進んだ。保育は、進んだかどうかわからんのだがね、批評とかね、理論づけだけは進んだけれど、保育自体が良くなったかどうかはわからんと。も一つ気になるのは、幼稚園や保育所に理論がなくて、エリート教育の風潮に流されているみたいなのが多いこと。これではいい保育はできないな。もっと子どものほんとの幸福と発達を考えなけりゃね。

保育が昔に比べてよくなっていない、など放言（？）したが、これについてはもう少し追加して説明する必要があるな。保育を構成しているのは、環境と施設・設備、それに保育者と児童である。施設・設備はよくなったし、保育者養成教育もよくなった。保育に関する研究もどんどん出ておる。それなのになぜ保育が進んでいないというんだと詰問されるだろうな。しかし僕はこう思うんだよ。設備や保育者養成がよくなることと、保育がよくなることとは別ですよ。保育の目的については、幼稚園では「幼児の心身の調和的発達をはかり、健全な身心の基礎を養うようにすること」とある。保育所も大同小異で、恐らくだれが考えても余りこれと変わることはあるまい。そこで第一に保育の理論の実践に問題がある。心身の調和的発達を目標としながら、この原則はしばしば無視せられている。いま都会の――都会だけではないな――幼稚園では子どもに対してワークブックで漢字や算数教育が行なわれているんじゃないかな。これでは小学教育の下請けですよ。子どもが自由にはつらつとして遊戯を楽しむ時間、運動能力と体力を養う時

間、友だちと一緒になって争い、協力と社会性と情緒を養う時間が犠牲になっているんじゃないかな。また、沢山の幼稚園では先生が指導しすぎて、子どもの個性、自発性、創造性を伸ばす機会を奪っているみたい。またカリキュラムだけ整備して、子どものニードや自発的な発達を忘れているんじゃないかな。ピアジェはこの点にふれて、「教師は児童に関心を持つよりも、教えることに関心を持っている」と述べているよ。僕も大いに賛成だな。それだのに、ピアジェの名で大変な主知的教育をしている幼稚園がある。ピアジェをなんと読んでいるのだろう。全然ピアジェを知らないよ。僕も誰にも劣らず、幼児の知性が伸びることを願いますよ。しかし今の多くの園では、保育理論を無視してしまって、その方法論を勝手に操作しているね。フレーベル――理論面では――、デウイイ、ピアジェらは、みんな保育について進むべき同じ方向を示していると思うがな。注入して教えこむことは、子どもに表面的な知識を与えるが、子どもが自分で活動し、自分で努力し、自分で考える力を与えないことである。ピアジェのいう「真の学習は、子どもが自分で活動することからくる」ということを忘れているよ。性格・社会性・情操の涵養についても同じことが言えるな。ただ、これらの幼稚園とは別に、少数ではあるが非常にいい幼稚園ができていることは忘れてはいけない。ただ数が少ない。六領域は保育における問題点を指摘して、気づかせるにはいいが、あまりこだわりすぎると、カリキュラムの柔軟性、保育の柔軟性を失なわせて危険だな。僕の批判は大多数の幼稚園についてです。

僕はまだまだ研究します。『幼児の教育』も八十周年だけではなくて、もっともっと御発展を祈ります。

〔記録・国吉栄〕

児玉先生は日本女子大学停年後、東京の成徳大学、そして現在は小田原女子短大に勤めていらっしゃり、第一線で活躍中です。

次に児玉先生の長年にわたる御研究から、児童研究と保育に関するものを掲げます。

1 『子どもの心理としつけ』共著（主婦の友社）昭和21年
2 『児童心理学』（日本女子大通信教育部）昭和25年9月
3 『青年心理学』（日本女子大通信）昭和27年6月
4 『保育理論』（日本女子大通信）昭和28年2月（フレーベル・デウイイ・モンテッソリイ・ハロルド・アンダソン等の理論を取り上げた）
5 『子どものしつけと性格』（フレーベル館）昭和44年（しつけの研究を一括し取り上げた）
6 『本邦の幼児の精神発達の研究』共著（フレーベル館）昭和44年（日本の幼児の社会性の発達の研究がある）
7 『保育原理』共著（東京書籍）昭和49年（著者の保育効果評価法を提案、ピアジェの精神発達を説明してある）
8 『人間形成の基礎』日本のしつけと児童の性格形成の研究（日本教育心理学会第10回総会宿題報告）昭和42年
9 『幼児・児童の問題行動の研究』（小田原女子短大紀要）昭和54年
10 『横田基地周辺騒音の住民生活への影響について』（東京都公害研究所）昭和46年（この中に騒音の児童、幼児への影響の調査報告がある）
11 『WISC知能診断法』共著（日本文化科学社）昭和38年
12 『WISC・R知能検査法』共著（日本文化科学社）昭和53年
13 『保育効果の評価法の研究』共著（小田原女子短大紀要）昭和52・53年
14 『児童のロールシャッハ反応の研究』（ロールシャッハ研究）昭和47年